

## 比較語彙論への批判と対応

田 島 毓 堂

### 0. はじめに

学問にとって「批判」ということは、その発展のためには何よりも重要な栄養であるということ、それは分かっていることだと思いますが、私が身をもって経験したことをつづり、自分自身にとっての今後の指針とするとともに、本稿の対象である「比較語彙論」の発展に資するものになりたいと思い、まだ、中間的なものでありますが、いかなる批判があり、それがどのように解決されたかということを書きたいと思っています。

### 1. 比較語彙論のコンセプト

私は、今からちょうど10年前に、それまで多くの語彙調査を通じて感じていたこと、語彙研究の論文を読んで感じていたことをもとに、「語彙論の課題」<sup>#1</sup>というテーマの論文を発表しました。私はそのとき総体としての語彙を対象とする学問に興味の中心がありましたが、それが何かのデッドロックに乗り上げている感じを持たざるを得ませんでした。「語彙」という用語の誤用の甚だしさは現在に至るも解消はされていませんが、当時も目に余る物があり、結局、それは、総体としての語彙研究の未開、言い換えれば、語彙論と言えば個々の語を対象にするものであるかの観に覆い尽くされていたことによるものだと思い知らされました。そういうこともあり、語彙論を個々の語に対する研究分野＝語彙元素論と、総体としての語彙研究＝語彙総体論とに一旦は分けておいた方が、誤解のないこと、そして、集団的規範＝ラング的なものと、個別の実現＝パロール的側面をはっきり分けて論じなければならないことを、すでに分かっていたのかも知れませんが、その混同の見られるものが目につくことから、それをはっきり自覚的に区別する必要を提唱しました。その中に「比較語彙論」で後に重要な語彙分析方法となる「意味分野別構造分析法＝The Strucral Analysys of Vocabulary with Special Reference to Semantic Categories」<sup>#2</sup>提案いたしました。このとき、対象語彙は日本語しか念頭にありませんでした。

その年、名古屋大学に独立大学院として開設された国際開発研究科国際文化協力専攻の協力講座民族文化学講座に出講したことを契機に、自分の専門領域で出来ることということで、目を他言語に向け、語彙比較による異文化理解ができはしまいかと考えるに至り、「比較語彙論」の基本的コンセプトを得ました。これに関しては、留学生の存在が大きく関わっておりました。2年

後、「異文化、その理解と比較の一方法—語彙分類を通しての原理的考察—」<sup>23</sup>で、基本的考えを述べ、ついで95年に「比較語彙論の構想—異文化比較研究のために—」<sup>24</sup>に具体的構想を提案し、同時に「源氏物語語彙意味コード試案—語彙の意味構造分析のための、意味コードの付け方—」<sup>25</sup>を発表し、それに基づいて「源氏物語と絵巻詞書の語彙—比較語彙論的考察試案—」<sup>26</sup>で具体的考察をいたしました。私自身、これによって、自らの確固とした立脚地を得た思いが強く御座います。丁度、方言を専門になされた、名古屋出身の言語学者柴田武先生が、本学で集中講義をして下さった最初にしみじみと述懐されたことを思い出します。先生は、当時、方言研究界で支配的になりつつあった言語地理学という方法により、安心の地を得たと仰っていました。私は、柴田先生のようにえらい学者ではありませんが、とにかく、それまで語彙論に従事し、関係の論文を読んでいましたが、一つとして心に響くものがありませんでした。大変な手間暇が掛かっていることは、自分で語彙調査をしてみれば身にしみて分かります。勿論、その語彙調査も自分から買って出てやっていることです。手間暇の掛かることを意味ありげに話すことではありませんし、どんな分野でも、それ相応の手間暇は掛かっているはず。ただ、その苦勞を知っているだけに、折角の論文が、ちっとも、その努力の成果を表していないことに、大きな疑念を持っていました。後に、それが何故であるかは、はっきり分かりましたが、初期の私には大きな疑問になるばかり、語彙研究の世界から退却すべきかとも思案しました。

しかし、そういう中でも、以前目にした阪倉篤義氏の「万葉語彙の構造」という論文がいつも気に掛かっていました。この論文には、「その一」と有りましたが、遂に、その二は現れず、「一」は「唯一」に成ってしまいました。その実、その論文の中には、直ぐにも、阪倉氏自身の続編が出そうなのが書いてありました。後になって、この論文に続く論文を、浅見徹氏ほか何人かの方々が、この方法を踏襲されてお書きになりました。私もその方法を語彙分析に利用しようとしたのですが、実際には、幾つも超えなければならない問題がありました。その第一のきっかけになったのが、「語彙論的語の単位試論—意味単位と分類単位と—」<sup>27</sup>であり、ここではすでに、語彙の調査単位の問題・コード付けの問題が素朴な形で表れておりました。

以下、私が阪倉氏の方法に対して成した批判と、その対案、及び、私が提案した比較語彙論に対する批判と、私がそれに対して答えた事について述べ、現在の比較語彙論の有りようを将来に向かっての展望を述べたいと思います。そして、それに対しても又忌憚のない御批判を御願いたしたいと存じます。

## 2. 阪倉論文に対する批判

先ず、私が阪倉氏の論文に対してした批判について簡単に述べます。詳しくは、「語彙研究としての意味分野別構造分析法—阪倉篤義論文の顕彰と批判—」(『国語と国文学』77-6 2000 以下、「顕彰と批判」と略称する)をご参照いただきたいと思います。ただお断りいたしておき

ますが、これは、決して批判のための批判ではなく、語彙論建設のための建言であり、阪倉論文の顕彰のためであったということでもあります。そして、阪倉氏は御自分がされた方法に特に名前を付けていらっしゃるいませんが、私はこれに「意味分野別構造分析法The Strucral Analysys of Vocabulary with Special Reference to Semantic Categories」と命名しました。はじめ、これを「意味構造分析法」と称していたのですが、湯浅茂雄氏のご批判とご提案をうけ、今のように改称いたしました。

阪倉氏の論文について、細かく言い出すと多くの問題がありますが、この論文に書いた二点に絞って申し上げ、その他、若干のこの論文にふれなかった点を申し上げます。

一つは、言語研究に欠かすことの出来ない、ラングとパロールの視点であります。阪倉論文はそれを混同しています。私は、言語のラング的側面を「集団的規範」、パロール的側面を「個人的実現」という用語で表現しております。指すところは、ほぼ同じ様なことではありますが、ソシュールがラングを確固不動の（とは言っていませんが）もののようにいい、ラングを同一言語社会の成員は「同じ辞書を脳中に貯えている」と言った比喻で表していることにどうしても同意できませんので、同じ用語を使うことを差し控えております。ラングが同じであったら、言葉の行き違いも言葉の変化も起こらないはずであります。個々人のラングはそれぞれ微妙にか、大きくかとはもかく、違っているものだと思います。これについては、かつて同僚であった高山倫明氏のご助言により、上記のような用語を用いたものでありますことを申し添えておきます。

阪倉氏は万葉語彙という個別語彙を扱いながら、実際には、万葉時代のラングを対象にしようとしたとしか思えない扱いをされます。具体的に言えば、実際に万葉集中に出現していない語でも、万葉集における訓仮名の用法から、存在が推定される語を万葉語彙の中に算入されてしまったのです。これでは混乱いたします。すなわち、「鶴」という文字、「～しつるかも」といった表現の中で、「～鶴鳴」などと使われます。例えば、「山辺の御井をみがてり神風の伊勢処女ども相見鶴鳴(万葉集1-81)」とあります。ところが、万葉集の中には「鶴」と言う鳥は読み込まれていますが、決して「つる」とは表現しません。後世の和歌の中でもやはり「つる」とは言わないようです。歌語として「つる」は何かなじまないものがあったのだと思います。何故かは、十分説明できません。物語や随筆には用いられています。つまり「つる」という語は万葉集にはないので、しかも、「鶴」という文字を「つる」と読むから万葉集の名詞語彙の中に、「つる」という語を加えるという、方針を立てられたのであります。例示されたのは、この「つる」と、「しらに=白粉」「かも=氈」の三語だけですが、実際に、こういう手続きでどれだけの語が算入されたかは分かりません(「胡粉(しらに…白い土)」=「知らない」の意味で用いられるものです。11-2677「還者胡粉 歎夜衣大寸(かへりはしらに なげくよぞおほき)」、13-3255「処女等之 心乎胡粉(をとめらが ころをしらに)」「氈(かも…敷物)」=助詞の「かも」7-1415「玉梓能 妹者珠氈(たまづさの いもはたまかも)」(7-1416番歌は1415の或本歌ですが「玉梓之 妹者花可毛」とあります)。

異なり語として扱われたために、問題は顕在化しなかったのですが、延べ語として扱えば使用度数ゼロの語を万葉語彙としてしまっているということで直ぐに分かったことです。これはどうしても改める必要があります。集団的規範の語彙を扱おうとするのか、個別の実現の語彙を扱おうとするのか、きちんと意識しさえすれば起こらない混乱であります。つまり、万葉時代にその集団的規範としては、そういう語があったことは確かでしょうが、個別の実現としての「万葉集」には無い語なのであります。後の他の方の論文にも、この混乱が見られることが有りますが、意識の問題だと思います。このことは、きちんと区別しておかなければならない重要な問題です。

もう一点は、調査単位の問題で、これは古くて新しい問題であります。いまだに、万人が納得するような単位に関する定義はありません。特に複合語に問題が集中します。阪倉氏の方法の要点は語彙分析に意味の視点を導入することでした。勿論、未だ素朴な意味分類ですが、いやしくも、意味を分析の視点に据えるならば、個々の語の意味を過不足無く、如実にすくい取る必要があります。そのことは、十分意識しておられたことは、出来る限り分割するという方針を取られたことに現れています。しかし、少しでも分割できない複合語を認めざるを得なかったことは、もう意味をすくい取り損なうことを意味します。それと同時に、分割される語とされない語(たとい少数であっても)が有るということは、語を計量する立場では、単位として不均衡を生じます。この点について、私は、全ての複合語を構成要素毎に分割して、「意味単位」と称し意味単位にコードを付けることにしました。ただ、そうすると、全体としては、個々の意味単位の合計からは予想できないような意味になるような語、例えば浅見氏が挙げられる「朝北」のようなものは、当初は、やはり分割せず、それに適するコード(「朝北」なら「風」のコード)をあたえることにしていました。しかし、不徹底の感を免れません。阪倉さんに対していった批判がそのまま当てはまります。それで、現在では、全てを要素に分割した上でコードを与え(これを「語彙の要素のコードの意味で「語素コード」と呼ぶことにしました)、要素の合計からかけ離れるもののあることに鑑みて、語全体の意味に対するコードを「単語コード」として与え、両者を併用して、意味の欠落を防ぐとともに、個々の要素の合計と現在ある意味の乖離とを埋める方策としております。もちろん、その単語コードが、その語の意味を如実に過不足無く示すようなものとしてあるならば、語素コードなどは最初から要らないのですが、如何に、意味分野を細分化し、意味カテゴリーを細かくしても、その要求を満たすことは不可能です。そのための、語素コードなのであります。

この問題は、私にとってもずっと懸案でしたが、語の単位の定義はともかくとして、何回も基準を改定し、ようやく五回の改訂で、これではばいけるところまで来ました。これも、対象言語が広がれば、細部について改訂の要はありますが、それも見込んでおります。

猶、単語の単位についても、言葉の根本に立ち返り、発音を基にして、割合簡単で然も間違いの少ない、文節に基づいた私なりの定義を作っております。もっとも、「文節」というものについては、その名称についてもあまり適切でないこともあり、若干の批判があることは承知してお

りますが、学校文法で用いられている名称だけに、今更変えるのもなかなか難しいものと思えますし、音声言語に基づき、言葉の生理に基づいているだけに普遍性があり、調査単位の基礎として誤りが少なく、容易に認定できる長所から、これに依るのが、適切だと考えております。

### 3. 多義語の扱い

「顕彰と批判」の中にも少しふれましたが、多義語の問題などはその一つです。それは、私の考えに対する批判でもありますので、私への批判に対する答えとしても申し上げます。

阪倉氏は、語の多義の問題について、いわゆる中心的意義とか周縁的意義というようなことを持ち出されています。そういう議論が世の中では重要な意味あることのように取り上げられていますが、そういう方向では、意味論としては意味があるのですが、語彙論として実際問題の解決には成らないと思います。私に対する批判としては、コード付けに際して「文脈の意味」をどうするのだということがありました。つまり、語の意味といっても、使われる場所で違うのだから、どの意味にコードを付けるのかという質問で、同時に、その批判は、コード付けなどは不可能に近いというニュアンスでした。

そう言われれば、いかにも難問のように思えます。そして、事実、今までどなたも解決してはいなかったのです。しかし、考えてみれば、実際に言葉を発したり文章を書いたりするときには、余程のことがない限りは、その場では、その語は一義的に決まっています。もしそうではなくて、こういう意味でもあり、ああいう意味でもあるということになれば、だいいち意志をきちんと通じることすら不可能です。中心的意義も周縁的意義もありません。そのとき使われている意味こそが全てです。もっとも、和歌や詩に見られる掛詞、或いは駄洒落・地口といった、意味を取ることより、言葉を楽しむような場合はコミュニケーションの成立と言うこととは、必ずしも関わりが有りませんので、それは除いて考えます。原則的に、実際に使われるときは一語一義です。わざわざ二義を掛けているような掛詞は、表の意義だけを採用するというような阪倉氏の方針は良くないこととなります<sup>28</sup>。作者が込めた意味は汲み取らなければなりません。

つまり、これも、集団的規範としての語彙を考えるか、個別の実現としての語彙を考えるかに掛かっています。実際に使われるときは、多義ある言葉もその中の一義を用います。従って、パロールの場合原則一義であり、多義語ということは、ラングとしての語彙を考えるときに発生する問題だということです。疑似ラングとしての辞書には理想的には、使われる限りの意味を書いておくべきでしょう。勿論限度はありましようが。その時に、ある一語に対して、多義であることが問題になるわけです。コード付けの問題と言うならば、個別語彙にコード付けをする場合は、当然文脈における意味を対象にすべきです。そうは言っても、ある程度の限定とかまとめをする必要はあると思いますが。集団的規範語に対しては、その持つ意味全部にコード付けする必要があります。それをどのようにするかは、技術的問題で、「多義語をどうする」というよう

な、解決不能に見えるような問題ではなかったのです。以前、色々の方が悩んだ問題も、このように考えればすっきり致します。もちろん、意味論としての問題は別です。なお、コード付けの基準としている『分類語彙表』と多義語との関係については、もう一言ふれる必要があります。

『分類語彙表』には一語一コードというのが多いのですが、一語に対して複数のコードが割り当てられている語もあります。つまり、多義語と認めて意味ごとに別のコードを与えているのであります。たとえば、「家」に対して、建物の1.440、家庭の1.251、家族としての1.210です。「手」に対しても、体の部分としての手に1.573、方法としての手に1.3081、人としての手に1.202といったようにです。動詞についても、「上げる」は実際に上下する意味での1.1540と人に物を与える意味での2.377です。しかし、これは、多義語を積極的に認めていくには絶対的に不足です。極端なことを言えば、実際の使用はそのたびごとに違っても言えるのですが、そう言っているのは、分類の意味がありません。どこかに線を引かなければなりません。どうしても補う必要のあるものと、拡大解釈によって、特別不都合でない場合とがあります。コード付けは語の分類には違いありませんが、分類のための分類ではありません。語をグルーピングするということ、そして、実際に使われている意味は大切にしなければなりません。あまり細かなことにとらわれていては本来の目的に応えられなくなることは避けなければなりません。ただ、抽象的動作か、精神的な活動か、自然現象に属することか、などは、最低限区別することは必要です。たとえば、宋永彬氏の言われるように<sup>註9</sup>、「やく」という語が、物を「もやす」のか、「嫉妬する」意味なのかは区別しなければ何ともなりません。従って、『分類語彙表』によるとはいうものの、必要な改訂は加えていかなければなりません。

ただ、まだ具体的な成果は全くありませんが、分類語彙表のコードも丸ごと取り入れた上で、さらに語種・語構成・語の基本度・語に対する価値観・共起情報等種々の情報を取り入れた語彙詳細コードの構想があり、早晚実現させたいと思っています。その折りには、多義をどこまで採用するか、十分考えていこうと思っております。

## 4. 比較語彙論に対する批判

### 4.0 比較語彙論は新しい分野

比較語彙論は新しい研究方法による新しい学問分野であります。

比較語彙論の目的は次のようなものです。ある言語はその文化によって育てられ、一方、その文化は、その言語によって<sup>はぐく</sup>育まれます。文化は、言語に反映します。言語は文化そのものだとされることもあります。文化が、言語の文法や音韻に反映しないとは言えませんが、それはまことに微妙でそれを何と明示的に示すことは誠に困難です。それに対して、語彙は、文化・生活との接触面でありますだけに、その反映は直接的です。その語彙に反映した文化を知ろうとするものです。ある文化を育てた言語の語彙と、例えば、日本語の語彙とを比較することにより、そ

の共通点と相違点を知り、更に、その原因を追究しようとするものであります。なかなか、大変ではあります、語彙の比較を通じて、文化の根底まで深く理解しようとするもので、異文化理解ということを目的に据えたものであります。

このキーコンセプトは、阪倉篤義氏の「万葉語彙の構造」『分類語彙表』前書きに言及されております。

順序は逆になりますが、『分類語彙表』の「まえがき」には四つの役割が掲げられています。第一が類義語辞典、表現・詞藻辞典としての役割、第二に類似語形を知る手がかりとしての役割、第三にある言語体系・言語作品について表現上の特色をみる物指しとしての役割、第四に基本語彙設定の基礎データとしての役割です。第三の役割の中に、「このような意味の一覧表に語彙を当てはめると表現の過不足や用語の特徴的な集まりが明らかになるであろう。そしてもし分類が十分妥当であるならば、異なった作品の間とか、異なった言語体系の間とかの語彙対照の物指しとなり、一方では、それぞれの言語社会の精神構造や生活構造を解く基本的手段ともなるであろう。族制語彙とか、色彩語彙とかいう、一部のまとまった項目についての研究もあるが、それを語彙の全領域に及ぼして考えるのである。」と書かれています。ただ、ここでは、第四の役割が主要な関心事とされていますが、今、引用した部分には、すでに、比較語彙論のコンセプトが示されております。

このことは、阪倉篤義氏「万葉語彙の構造」(『万葉』34号 1960)の中で、『分類語彙表』の前身である林大氏の分類案を「日本語の意義分類のうち、科学的なものとしてはほとんど唯一の先蹤」といい、さらに、「普遍性をもった意義の分布表を標準にして、各時代、各作品の語彙ごとにその意味の「野」における分布の状況をあきらかにする試みがなされなければならない。それぞれの言語体系における、さういふ語彙の分布状況のちがひは、やがてその背景にある思考形態の相違を予想させるものであつて、…」ということにも、同趣の考えを読みとることが出来ます。

語彙を比較するためには、対象語彙の選定が先ず必要であります。それと同時に語彙分析の手段が無くてはなりません。この対象語彙選定と分析の両者について、比較語彙論は、その方法を提案しております。そして、選定された語彙を分析する方法が、「意味分野別構造分析法 The Strucral Analysys of Vocabulary with Special Reference to Semantic Categories」であります。

このように、比較語彙論は新しい研究方法による新しい学問分野であります。新しい事に関しては、当然ながら、「旧来の手法を守ろうとする人々・既存の世界からは無視され、敵視され、新世界においても、僅かな支援しか得られない」と、今回の名古屋大学国際フォーラム2002で、ミシガン大学名誉学長のデューダスタット氏が言われるとおりでと思います。

#### 4.1 用語「比較」

次に、比較語彙論に対する直接的な批判について検討します。

第一に、「比較」ということについてであります。ご承知のように、言語学の中で、大きな成果を上げた「比較言語学」という部門があります。そして、「比較」という用語は、こと、言語を対象とする学問では、そこで使われたように使わなければいけないという約束があるようでもあります。このことについて、比較語彙論はその約束に従ってはいません。それゆえに、「あなたの言う比較語彙論というのは、日本語を中心にするなら、同系の言語が見つかったというのでしょうか」とさも、「物を知らぬ奴が…」という口吻の批判に接したものです。偉い先生からも、そういうのは「対照」というのだというご注意も受けました。中には、それを見越して、「比較」をそういう風に使ってもいいですねと云われる方もありました。中には、一々そんなことを断らなくても良いのだという御意見もありました。しかし、まずは、この「比較」ということを、比較語彙論においては正当なものであることを理解していただくことが一大事でした。その実、よく考えていくと、「比較語彙論＝語彙論」であり、わざわざ物議を醸すことはなかったのですが、語彙論の現状からは、多少インパクトのある名称の方がむしろ好ましいと思い、相変わらず、比較語彙論を標榜しております。

話がそれましたが、比較言語学で同系言語に比較対象を限定するには訳があります。そうしなければ、比較自体が成立しないからであります。その比較の対象はご承知のように、「音韻」であります。系統の違う言語における「音韻比較」は面白いかも知れませんが、それだけで、特に意味を持ちません。日本語のナマエ *namae* と英語の *name*、インドネシア語の *nama* はよく似ていますが、偶然以上の物ではありません。これで、言語間の親疎などを論ずることは出来ません。それはしごく当然であります。しかし、それかと言って、「比較」などという極く普通の、然も、研究の基本になるような言葉を「比較言語学」という狭い範囲に使用を限られてはたまりません。「学問の用語は定義に従って用いるのが当然で、やたらに変更するものではない」という批判もありましたが、事によりけりで、これを全て「対照」で済ますことが出来るでしょうか。比較言語学で言う方の「比較」を狭い意味での「比較」と限定すべきだと思います。

ところで、比較語彙論で比較するのは「意味」です。これは、同系言語に限りません。意味は、どの言語にも共通の、ほぼユニバーサルであると考えて良いと思います。勿論、完全に一致するわけではありません。言語によって世界の切り取り方が違うのは当然で、それは、比較語彙論の恰好のテーマになることであります。

このことに対しても「意味がユニバーサルだという証明がありますか」という批判がありました。恐らく、そんな証明はないと思います。しかし、素朴に考えて、翻訳が可能であるということは間接的に証明になると思います。勿論、一对一の翻訳など不可能ですが、その違いはやはり、比較語彙論のテーマになるべきもので、比較を疎外するものではありません。全て証明済みでなければいけないというのは、何もやってはいけないと言うのと同じ事だと思います。



こんな事はわざわざ議論せず、もう世の中には「日英比較文法」などという講座が出ているくらいです。しかし、比較語彙論の根拠をしっかりとさせるためにあえて、批判に答える形で述べました。猶、先ほど、「比較語彙論＝語彙論」であると申し上げましたが、これについては、次ぎに説明いたします。

#### 4.2 他の語彙—語彙史記述の方法

比較語彙論の構想を提案したとき、念頭にあった比較対象は「他言語の語彙」でありました。しかし、「他言語の語彙」とは何かという質問を頂きました。考えていきますと、なかなかの難問でした。元々、比較語彙論は目的として、語彙の比較を通じて、その語彙に反映する「文化」の比較、そして理解ということを持っておりました。その原点に立ち返って考えてみれば、比較対象はその語彙の背後にある「文化」の相違ということを目標にすればいいということでもあります。相違する文化とは何か。そもそも文化とは何かと考えますと、生活を律する思想・信条をはじめ、風俗・習慣等、諸々であります。それで、そういう文化背景・思想背景を異にする語彙は全て比較対象になると考えるようになりました。極端なことを言えば、同一人の別の言語作品の語彙は既に思想背景を異にする語彙であり、比較対象になります。つまり、同じ語彙以外は全てが比較の対象になるということでもあります。何も言語が別であることは必要条件ではないということでもあります。それで、「他言語の語彙」と言っていたのを「他の語彙」といい換えました。そうすることにより、同じ言語の語彙の歴史的研究に道が開けました。

従来も、「語彙史研究」ということは盛んに言われ、「国語語彙史研究会」という組織があり、『国語語彙史研究』という論文集が1980年来もう21冊も刊行され、多くのすぐれた論文が収められております。それは貴重であります。その中に、本当に「語彙史」というのにふさわしいものは前田富祺氏の論文以外にはそんなに沢山はありません。語彙史の方法を正面から論じたものも見あたりません。多くが、「語誌」あるいは「語史」であります。これを幾ら積み重ねてもなかなか「語彙史」には成らないと思います。「語彙史」には「語彙史」の方法があり、私は、請われて「語彙史記述の方法論への提言—比較語彙論の方法による—」(佐藤喜代治編『国語論究』8 2000, 11)という提案をいたしました。「語彙の体系」が良く分かっていない現状では、比較語彙論の提案する方法によって、対象語彙を選定して時代的に比較することが、語彙史記述のために適切な方法だと思っております。この、方法に従って語彙史研究に取り組んでいるのが、広瀬英史氏であります。しかし、これは、比較語彙論全体に通じる事ではありますが、なんと言っても、「意味分野」という粗いカテゴリーが基準になっております。これは、今後精選していく必要があり、最後には個々の語の問題に到達すべきであり、その意味では「語誌」に到達すべきものであります。ただ、最初から、特定の語の語誌を記述するのと、結果的には仮に同じであっても、全体から見て、注目すべき言葉を見つけだして記述するのと、はじめから特定の語を目標にするのでは、方法、目的が違っており、一方が一方を否定することには成りません。相携

えるべき事であり、ここに、語彙論が、個々の語と、総体と両者を対象にしなければならないことが、明確になると思います。比較語彙論が対象にするのは、「他の語彙」であり、同じ語彙でないものはすべて対象語彙になります。こう考えてきますと、比較語彙論は語彙論そのものであり、当初他言語の語彙を比較対象として想定していたときの「比較」と学問の方法そのものとしての「比較」というように、内容が変質していますが、前にも申しましたように、語彙論の現状から見て、「比較語彙論」を標榜しておきたいと思います。

#### 4.4 他言語との比較は成立しないという批判とコード付け

比較語彙論に対して、否定的な批判は内容不明な批判はともかくとして「他言語とは、元々システムが違うのであるからその語彙との比較は成立しない」、「そんなことは絵空事だ、早く止めなさい」ということでした。語彙研究者からの御批判でしたが、この忠告には従いませんでしたし、従わなくて良かったと思っています。私はやってみなければ分からないと思うとお答えして、比較するために同一の基準でコード付けが出来ないかと工夫してみました。同一基準でコード付けが出来れば、比較は可能であります。ここでは、コード付けのことそのものについては割愛し、第五次まで進んできたコード付けの基準をご参照願うことに致しますが、やってやれないことはないのであります。現にこれを使い、インドネシア語・韓国語・中国語との比較が行われ、ここでは申しませんが、既に幾つかの成果を生みだしているのであります。もちろん、十分満足できるかどうかは問題もありますが、それは、改良していけば出来るという程度のことであり、土台無理だといった絶望的なものではありません。一から完全を期することは出来ません。もし、それを求めるとすれば、全てを否定することです。

#### 4.5 語彙論の対象—総体論と元素論

私は、語彙論も文法論・音韻論がそうであるように、その単位になるものと、全体の両者に対する研究が必要だと思っています。ひとり語彙論においては、古来、個々の語に対する研究だけが盛んでありましたが、全体、つまり、文字通りの語彙に対する研究は殆ど行われず、ために、語彙論といえば、個々の語の研究だと思っている人が現在でも数多くいる状態です。これが、私が度々申している「語彙」を「単語」と同じように使うという用語の誤用にも繋がっているのだと思います。この誤用は、救いようのないほどひどいもので、言語研究者がこういう用語に無神経であることは、嘆かわしいことです。そういう方の成果全体についても疑いを差し挟みたくなくらいです。繰り返し、用語についての反省を促しておきます。単に、「記号」ならば約束事で済みますが、言葉を用いた用語には、言葉の意味がつかまとうからであります。この誤用の原因についてはいくつも要因がありますが、根本は、語を総体として扱う部門が発達しておらず、語彙研究と言え、ほとんど、個々の語の研究に限られていたという、語彙研究の偏頗な発達にあったのだと思います。ということは、この誤用をただすには、総体としての語彙

研究の発達を促すより方法はないということなのであります。それ故、語彙論は本来、その単位になるものと、全体との両者に対する研究が必要だと思っておりますが、そう言っても始まりませんので、一旦、個々の語に対する研究部門を「語彙元素論」、全体に対するのを「語彙総体論」と、それぞれ区別しておくことを、この区別が無くなることを祈念しながら提案いたしました。単に語彙論といえば、ある人は個々の語に対する研究だと思ひ、一方では、総体に対するものだけをさすと考えられる人がいる中では、無用の混乱を避けるために分けておく方が賢明だと考えたからであります。

しかし、この分け方に対して、名称のことはともかく（このことについても種々意見がありましたが一長一短であります）、その中間段階があるのではないか、という意見が寄せられました。ある特定のグループの語彙に対する研究を言うのであります。ただ、この、元素論・総体論と分けるのは、意識の問題であります。すなわち、語彙を総体として扱おうとするのか、個々の語を個々の語として相手にするののかということであり、語彙の大きさは問題ではありません。語彙は、言うまでもありませんが、語の集合であります。集合の仕方は千差万別であります。語をその集合の元だとすれば（普通そうしているようですが、語の定義のこともあり、何を元にするかは、本当は問題です。音韻の単位を音節とすることも単音とすることもできるように、いろいろ考え方があります）、極端には、元のゼロの集合も有り得ますし、殆ど無限大ということもあります。従って、中間の段階を設定するということは不必要だということになります。

#### 4.6 語彙の体系のこと

語彙の体系が音韻のように透明性のあるものならば、語彙研究も余程違っていたと思いますが、文化との接点ということもあり、世の移り変わりと密接に関係し、それ故、複雑で、曖昧で、いろいろ重なり合い、とても、一筋縄で解明できるような生やさしい物ではないようであります。以前、私は、これを「体系がない」などと不用意な言い方をしておりましたが、言語において、「語彙」を他の領域から、つまり、音韻・文法などと区別して扱うことが出来ること自体そういう「語彙の体系」そのものはあるのであると言われ、その通りと合点いたしました。つまり、語彙は、その体系内の組織が不透明で複雑で曖昧だというだけであります。また、意味の体系とは、別物であることについては度々申しております。『分類語彙表』を語彙の体系だと思っている人があると聞きますが、これは意味の分類であります。それが、仮に、意味の体系ではあっても、決して語彙の体系ではないということでもあります。その実、『分類語彙表』は意味の体系でもないと思います。意味の体系について、ここでどうこういうつもりも能力もありません。ただ、語彙の体系というならば、当然ながら、語形と意味との対応関係が、上下だけでなく、横にも関係が有るべきものと思っております。このことは、ここで止めます。語彙の体系は現に存在するものですので、「体系がない」などと不要な言い方を避けるためにも、体系内の「組織」が不明だと言うことに致します。

#### 4.7 異なり語という言い方について

私が国語学会で「異なり語と延べ語」と題して研究発表をしたとき1995,10、「異なり語」という言い方、「延べ語」という言い方は未だ使われたことのない用語だと複数の方から指摘を受けました。「異なり」「延べ」と言うべきだという注意であります。国立国語研究所ではそうだったのであります。しかし、「延べ」はわりあい誤解を生じないものの、語彙を対象にしているときですら、「異なり」は「一体なんですか」などと質問を受けることがあります。「異なり語」と言えば誤解はありません。阪倉氏は1960年の論文で既に、「異なり語」と使っていらっしゃいます。私は、阪倉氏が使っていないなくても、「異なり語」は必要な用語だと思います。「延べ語」はあまり必要ではありませんが、「異なり語」に合わせて「延べ語」と言っておこうと思います。なお、言わずもがなのことでありますが、延べは個別語彙<sup>40</sup>を対象にするときだけにあり得ることで、集団規範としての語彙を考えると、基本的にあり得ません。ただ、それを分析対象にするときには、この両者の規定量があることが便利です。規範語彙についても、延べに代わるものとしてその基本度を数値化した物が使えればと考えております。

#### 4.8 コード付けしたことが分析の結果に現れる

コード付けの詳細については、ここでは申しませんが、「コード付けをそのようにしたから、そういう分析結果が出たに過ぎない」という言い方をされたのを聞いたことがあります。私に直接向けられたものではありませんでしたので、その時は答えませんでした。比較語彙論のコード付けに対して成されたものであることは明らかですので、それについても答えておきます。

私は、語彙論の対象は言語の全てだと思っております。もちろん、音韻論や文法論・意味論の方法の方が、適切に対処できる分野や問題もあり、語彙論的には対処の難しいことは、当然ありますが、対応できる限り、言語の全ての領域にわたるものだと思っています。そして、語彙論が対象化できることは何かといえば、コード付けできるということがらだと考えます。コード化するには、言語そのものに対して深く沈潜して理解を深める必要があります。そして、コード化できたことが（現在コード化できない種々の言語現象については度々言っていることですので詳細は述べませんが、一二項目をあげれば、言語行動の中で意味を持つことで、しかも、コード化になじまないこととして、語順の問題・イントネーションの問題・声の大小・書かれる文字の大きさと位置などがあります）、語彙論的分析の対象となり、分析の結果に現れるのであります。従って、先の意見は当然のことを当然のこととしていっているのであり、むしろ、知らず知らず語彙論的分析結果についての正しい理解であり、コード付けを正当なものとして認めていることになるわけで、批判と言うより、心強い意見といえるものであります。

#### 4.9 批判の必要性—有益な批判と無意味な批判

コード付けという事に関して、私は、『分類語彙表』を基準に使っております。もっともっと

適した基準が必要かも知れませんが、現在、他の方々も使っていることもあり、成果の比較にも、基準は同じ方がいいと思います。ただ、これは、比較語彙論のために作られたものではありませんから、当然改訂する必要もあります。そういうことは全て公開の上で行っておりますが、私が投稿した論文を査読した人が、「自分が使っているものを批判している」といって、(これだけの原因ではないかも知れませんが)、没にしたことを人づてに聞きました。こういう事は分かるものだと思いませんでした。それはともかく、あきれ果てました。自分の見識の無さを露呈しているとしか言いようがありません。批判のあるところに学問の発展があることは、本居宣長の既に喝破しているところです。そんなことの分からぬ人が良くもまっ…と思いますが、この論文は請われて、「文化言語学」という論文集に収められました。他にもそういうことがありました。分かっただけなかったのは、私の書き方もいけなかったのかも知れず、申し訳ないことをしましたが、私の言うことを、その審査員が理解できなかったに過ぎません。これも、他の全国紙に投稿したら直ぐ採用してくれました。こういうのは、無意味な批判です。批判なら何でも良いというわけにはいきません。比較語彙論はどうも、とか、荒唐無稽だというような批判をなさる方があると言うことも聞きます。直接聞いたことでありませんので、反論のしようも、説明をすることも出来ませんが、それこそ批判の名に値しない荒唐無稽な、目先のことにのみとらわれている戯言に過ぎません。ただ、その訳の分からない評価を聞いて自らの判断にする情けない人も世の中にはいるのです。罪作りの話しですが、そういうことが充満している世の中です。無意味な批判も、そういう考え方をする人もいるということを知る上では、その限りでは有益なのかも知れません。

## 5. 語彙論の確立

まだまだあると思いますが、甚だ残念に思っていることとして、『言語学大辞典』に見られる語彙論の存立自体に対する疑念が有ります。これについては無理解としか言いようがないもので、語彙論自体がそういう乱暴なことを言われぬように、言った人が恥ずかしくなるように、努力し、成果を上げるほか有りません。既に、比較語彙論的方法により、語彙論は確固とした地歩を築いたと思いますが<sup>11)</sup>、猶一層精進しなければならないと思います。

「わざわざ厄介な分析をしなくても分かることだ」というような批判については、もう何も言わなくてもいいと思います。そうではないことは事実が示しています。もちろん、そういうこともありましようが、比較語彙論的方法によって初めて明らかに出来たことも現にありましたし、薄々分かっているということも、客観的データを添えてしめすことが出来たことは大切だと思います。

何はともあれ、批判があつてこそ、学問は進展すると存じます。これからも、忌憚のない、そして、建設的な御批判を御願ひいたすものであります。

## 注

- 注1 田島毓堂「語彙論の課題—集团的規範と個別的実現—」『名古屋大学国語国文学』71 1992.12
- 注2 はじめ、この分析法を「意味構造分析法」と称しておりましたところ、諸方面から用語として適切でないとの指摘を受け、特に、湯浅茂雄氏からの提案により「意味分野別構造分析法 The Strucral Analysys of Vocabulary with Special Reference to Semantic Categories」と改称いたしました。このことについては、『比較語彙研究の試み4』2000.2に明記いたしました。
- 注3 『国際開発研究フォーラム 1』1994.3
- 注4 『国際開発研究フォーラム 2』1995.3
- 注5 『意味コードの付け方—語彙比較研究のために—』開発・文化草書12 1995.3
- 注6 『日本語論究4 言語の変容』1995.9 和泉書院
- 注7 『日本語論究 2 古典日本語と辞書』1992.11 和泉書院
- 注8 この方針は、水谷静夫氏「基本語彙と語彙調査」『国語教育のための国語講座』4 1959に示されている方針を踏襲されたものと思います。一カ所の言葉を二つに数えることの抵抗によるものと思われるが、現に存在する意味を無視することの方が、一つのものを二回数えるよりよほど問題がありましよう。そして、物体ならば、一カ所に二つ別のものが同時に存在することは出来ないでしょうが(質碍する)、「意味」は質量がありませんから、そういう制限はないと思います。
- 注9 宋永彬「意味より語彙へ」『国際シンポジウム 比喩語彙研究Ⅲ』
- 注10 注1の論文。個々の言語資料、言語作品の語彙のこと。「テキスト語彙」ということもある。
- 注11 田島毓堂「語彙論の開発と確立—比較語彙論の進展と言語学への貢献—」『比較語彙研究の試み 6』2000

<付記>文中、一々の御批判や御意見についてその出所を示さなかったものがあります。多くは私信の中のものでご迷惑を避けるためであります。又、仄間に依ったものも、だいたいは出所を把握していますが、一層、この出所は秘しておきます。